立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

センター通信

創刊号
2007. 1. 15

―目　次―

〈エッセイ〉
開設を祝して　浜田　雄介
旧江戸川乱歩邸のこと　横山　晋一
メイチかアケチか
―清張の乱歩批判―　藤井　淑禎
〈研究ノート〉
論介と喜遊の説話化の比較
―上海シンポジウムでの発表から―　岩谷　めぐみ
江戸川乱歩と横溝正史
―「本陣殺人事件」評を中心に―　落合　教幸
〈資料紹介〉
「秘密小説 二銭銅貨荒筋」
〈センターより〉
センター通信の創刊にあたって　藤井　淑禎
編集後記

〈エッセイ〉

旧江戸川乱歩邸のこと

横山　晋一

はじめに

江戸川乱歩、日本の戦前戦後期における推理・探偵小説界の草分け的存在であり、乱歩大衆文学は今でも多くの人に

愛され、また、大衆文芸史研究の一つに掲げられている。

その乱歩が永年の転居生活に終止符をうち、終の棲家とした豊島区西池袋の地。

（保存修復後の土蔵）

今は隣接する立教学院の所有となり、乱歩蒐集資料と共に保存と活用が大学主導で始まった。

土　蔵

土蔵は関東大震災の翌年、大正13年に建設されたものであり、乱歩が昭和9年に入居した当時から秘蔵の土蔵としたことで、巷では乱歩ミステリーの奇想源泉のごとく見なされてきた。

平成15年、土蔵は豊島区指定有形文化財に指定された。建物は桁行3間・梁間2.5間の木造土蔵造二階建（延床面積15坪）で、乱歩邸敷地の西端に位置し、修復前は主屋と接続していた。

土蔵の特筆すべき特徴の一つに、外壁が鼠漆喰で仕上げられることにある。一般的な漆喰壁は、城郭や町屋等でよく目にする白色か、川越の伝建地区で見られる黒色かのどちらかが殆どで、中間色となる鼠は希少である。修理前の外壁様相は白色であったが、それは後世の改修による戦後の塗装であり、調査でその下地に鼠漆喰が残存することを突き止めた。復原はこれに基づき行われたが、当初の配合に寄り近い深みを出すため、群青粉を配合する等、匠の左官技術を駆使した。

もう一つの特徴に、耐震対策がある。一見する和風の外観とは異なり、小屋組は耐震性に優れるキングポストトラスという洋風小屋組が採用され、屋根瓦下地にコンクリートスラブが打設されることで、建物の防火性と自重を増す工夫が取られている。また、漆喰下地に、スパイラル状のラス金網が用いられる点も、同じ耐震対策として見逃せない。

幻影城と称された土蔵は、乱歩大衆文学と大正建築史を物語るうえで、貴重な存在と言える。

（乱歩デザインの洋館）

洋館（応接間）

大正8年に建設された主屋の南東に、洋館はある。元々ここには四畳半の和室が存在したが、昭和32年の主屋増改修の折に、現在の洋館に建替えられた。

この建物は1階が洋室の応接間であり、2階は10帖間の和室となっている。外壁は当時としてはお洒落な黄色系磁器質タイルで装い、また、乱歩が好んだ応接間には大理石のマントルピースや、イギリス・ジャコビアン風デザインの家具が配される等、デザインへの拘りを感じさせる空間演出となる。

自宅増築記によれば、この洋館の建築デザインは乱歩自らが行ったようであり、後に探偵作家クラブメンバーの社交場ともなった。若き日の横溝正史も、その一人である。

洋館と主屋は、土蔵同様に往時の乱歩を振り返るための、貴重な文化遺産に相当するものと言える。

将来のこと

平成16年夏、立教学院創立一三〇周年の年、江戸川乱歩と大衆の20世紀展が記念行事として催された。多くの乱歩ファンが大学を訪れ、立教学院を称えた。

江戸川乱歩記念大衆文化研究センターの開設を期に、今後更なる研究が進められるものと思われるが、将来的にもこの基盤となる、オリジナルの建物保存を大学に請願したい。

都心に位置する大学では挙って、高度利用の校舎高層化が図られ、立教大学もシンボルゾーンと称する煉瓦造建物の領域を除けば、これが推進されている。実際の処、旧乱歩邸敷地でも一時期、あらゆる角度で建替え検討が極秘に進められていたのも事実である。

先人が残した文化遺産を適切に活用することも、歴史ある大学の使命であろうし、人間教育を営む場としてもこの上ないであろう。母校たる思いの立教大学に、大いなる期待をしたい。

（ものつくり大学
技能工芸学部助教授）